ずいそう

# 永良部リリーを訪ねて

淵　山　省　三

沖縄返還を2か月後に控えた昭和47年3月，沖永良部島への気楽な一人旅に出かけました。沖縄返還前の日本の最南端は与論島，その北にあるのが沖永良部島で，当時若者の間で人気の島でした。夕方，鹿児島港から貨客船に乗りましたが客船といってもほとんどが貨物で家畜のにおいも漂っています。客室（雑魚寝部屋）の枕元には洗面器が並んでおり，東シナ海に出たころから当然のようにこの洗面器のお世話になりました。

翌朝，島の南東部に位置する知名港に入港しましたが，接岸できる岸壁がないため艀（はしけ）に乗り換えて上陸しました。幸い天気が良かったので経験しませんでしたが，雨の日はブルーシートをすっぽりかけられるそうです。

桟橋のすぐ横の坂を50 mほど登った右側の小高い場所に予約した民宿が見えました。宿に入った瞬間，宿のおかみさんが血相を変えて私のジャンバーを指さし，「すぐに脱いで，島を出るまで決して着ないように」ときつく注意されました。上野のアメ横で手に入れた米軍放出品のジャンバーで，階級章や所属部隊名などはすっかり取り外されているのですが，背中に蛍光塗料を塗りこんだ大きな十字マークが入っていました。島内に米軍のレーダー基地がありヘリポートが併設されていたのですがそこの誘導員が着用しているジャンバーにそっくりだったので無用のトラブルを避ける必要があったのです。

沖永良部島は鹿児島市から南へ552 km，周囲55.8 km，面積93.8 km$^2$の隆起サンゴ礁の島で，車だと半日もあれば一回りできるほどの広さです。当時はレンタカーもありませんでしたので民宿の息子さんがバイクで島内を案内してくれました。

・田皆岬（**写真―1**）…島の北西部にある断崖で，国会議事堂や皇居にも用いられたトラバーチン（大理石の一種）の砕石場（跡）があります。

・暗川（くらごう）…地下河川が流れる石灰岩洞穴（**写真―2**）で，狭い穴を20 mほど下ると幅2 mほどの川が流れています。（ここは今でも地元の大切な水源です。）

・昇竜洞…昭和39年に発見された鍾乳洞で当時はほとんど整備されてなく，入り口を覗く程度でした。

写真―1　田皆岬

写真―2　暗川（くらごう）入り口

・フーチャ…島の北海岸特有の絶壁が浸食された潮吹き洞窟。台風時には70 mも潮を吹き上げるそうです。

……等々……

一日もあれば回れる小さな島ですので，特にやることもなく，波に侵食されて芸術的？な形をした奇岩と白い砂の浜辺にぼんやり座って，遠くでアオサを取っているおばあさんを眺めていましたが，島の言葉を教えてほしくなり，そのおばあさんに教わった言葉「ワヌ，ウラァ，シキヤシガ，ワァ～ツジ，ナラジェ？」（私はあなたを好きだ。私の嫁になってくれないか）

いよいよやることがなくなり，民宿のご主人と契約して船が着くたびに宿の旗をもって波止場に立つアルバイトを始めました。報酬は夕飯とパパイヤの味噌漬けを肴に飲む黒糖酒です。この時飲んだ黒糖酒の名前が「永良部リリー」です。

沖永良部島では百合の花（永良部ゆり　和名テッポウユリ）の栽培が盛んです。

2週間後に再びあの貨客船に乗って鹿児島港に戻りました。帰りは波も穏やかで，洗面器のお世話になることもありませんでした。

令和4年は沖縄返還50周年，私が沖永良部島を旅して50年がたったこの年の3月，再び沖永良部島を訪れました。那覇空港からターボプロップ機ATR42-600（48人乗り，**写真―3**）で約1時間弱の旅です。この機種は座席の一列目が対面シート（客同士が向き合う）になっていて，ここに座ると離着陸時に通常とは逆のGを経験できます。

写真―3　ターボプロップ機

和泊港に隣接したホテルに宿泊しましたが，港湾設備が立派に整備されて，当時はきれいな砂浜があった場所もすっかりコンクリートで覆われていました。

今回は明確な目的をもった二泊三日の夫婦旅です。一つは思い出の地をたどること。もう一つ主な目的は「永良部リリー」を探すことです。（ネット上では見つけることができませんでした）

飛行機の都合上，島内をめぐるのは2日目だけしかできません。見るべき場所は事前に調べてあるので，現地で調べることは「永良部リリー」の消息です。

夕食を取った居酒屋で聞いたところ，現在3つの酒造会社がありそうです。黒糖酒のメニューに「永良部リリー」の名はありませんでしたが，「天下一」という勇ましい（？）黒糖酒がありました。明日はまずこの酒造会社を訪ねることにしました。

翌朝，ホテルで手配したレンタカーで思い出巡りに出かけました。国頭小学校の校庭にある樹齢123年の日本一のガジュマル（**写真―4**）を見て，50年前とは逆のコースで島内をめぐりました。道路はすっかり舗装され，平成29年に奄美群島国立公園に指定されたこともあり，田皆岬やフーチャには遊歩道やトイレが整備されていました。永良部ユリはまだ咲いていませんが，鹿児島県のブランド品として切り花が各地に出荷されています。

写真―4　日本一のガジュマル

「天下一」の蔵元を調べると，知名町にある新納酒造さんです。訪ねてみるとここは50年前にお世話になった民宿と交差点を隔てた向かい側にありました。艀で渡った波止場は今では知名漁港として整備されて跡形もありませんし，民宿もありませんでしたが，舗装されたとはいえ波止場から民宿までの坂道は50年前を思い出すには十分な景色でした。「永良部リリー」はこの蔵元ではありませんでしたがそれが存在したことはご存じでした。和泊町にある沖永良部酒造は島内にある複数の蔵元の黒糖酒を販売しているので訪ねてみてはどうかとアドバイスをいただきました。

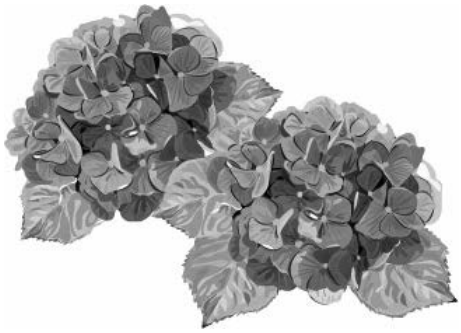
沖永良部酒造を訪ねると私と同年配と思われる御婦人にお話を聞くことが出来ました。

特徴的な容器（四角い）のこと，「永良部リリー」という名前のこと，すべてが記憶と一致しました。そのうえご婦人は知名町の沖永良部酒造のすぐ近所の出身で，うろ覚えだった民宿の名前も「大蔵」と確認できました。「永良部リリー」の銘柄はすでに消えていましたが，その流れをくむ酒として紹介していただい

写真―5　黒糖酒と沖縄焼物（ヤチムン）

たのが「古酒白ゆり」という黒糖酒です。運転中なので試飲はできませんがこれと確信して１本買い求めました。

翌朝，今回の旅の目的を達成できた満足感と，早く飲みたいという欲求を抱きながら沖永良部空港から那覇港へ戻り，その日のうちにボーイング 787 で羽田に戻ってきました。

今，その「古酒白ユリ」のお湯割りを飲みながらこの原稿を書いています（**写真**― 5）。

――ふちやま　しょうぞう　アンダーウォーターテクノロジー――